

年)などで、基本的な史料集成は成し遂げられた。また、それぞれの事績や政治動向についても、私自身すでに『扇谷上杉氏と太田道灌』(岩田書院)・『図説 太田道灌』(戎光祥出版)や、拙編『長尾景春』などでおおよそについてはまとめてきた。

これらの成果を踏まえて、本書では道灌と景春の生涯について、当時の史料をもとに可能な限り明らかにするとともに、それを関東の室町社会から戦国社会への転換という時代状況のなかに位置付けつつ、描き出してみたい。

すでに私は、室町時代末期から戦国時代初期にかけての、関東における社会転換の様相を描いたものとして『長尾景仲』(戎光祥出版)を著している。道灌はその娘婿むすめむこであり、景春はその嫡孫ちやくそんにあたるから、まさに本書はその続編という性格にあたる。この二冊をあわせることで、景仲が活躍した時代から道灌・景春が活躍した時代とを一続きにして認識できることになるであろう。

二〇一九年十一月

黒田基樹

目次

はしがき	1
第一章 太田道灌の登場	8
太田氏の出自／父・太田道真／扇谷上杉氏と太田氏の立場／ 鎌倉府の解体／道灌の生い立ちと名前／道灌の家族と系譜／ 江戸城の築城と入部／江戸城の構造と位置／江戸城周辺の政治勢力／ 道灌の江戸地域支配／領域権力の形成へ	
第二章 太田道灌と長尾忠景の台頭	60
父道真の隠居と家督継承／上野・下野への進軍／家宰としての役割／ 山内上杉氏勢力との確執／長尾景信の死去／長尾景信の功績／長尾忠景の登場／ 長尾景春の登場／上杉定正の登場／上杉定正の立場／「太田道灌」の誕生	
第三章 長尾景春の乱への序曲	107
長尾景春の蠢動／太田道灌による仲介とその失敗／駿河今川氏の内訌への介入／ 道灌の江戸城帰陣と逼塞／忠景方の攻勢／忠景の所領支配	

第四章 長尾景春の乱の展開

136

長尾景春の謀叛／上杉勢力の分裂／道灌の進軍開始／
道灌の北武蔵進軍と上野への後退／上杉方と足利成氏との和睦／
道灌は豊島氏を滅ぼす／相模の制圧と小田原城の大森氏攻略／
景春は鉢形城から後退、顕定の本陣となる／金山城の岩松家純を訪問／
下総千葉氏の追討／臼井城攻めと弟資忠の討ち死に／再び景春の蜂起／
都鄙和睦への取り組み／景春の武蔵からの没落／景春の叛乱への評価／
景春の「下剋上」の性格

第五章

都鄙和睦の成立から太田道灌誅殺へ

186

都鄙和睦交渉の展開／都鄙和睦交渉の進展／景春による憲房の擁立／
都鄙和睦の決定／「太田道灌状」の作成／都鄙和睦の成立／
道灌による下総・上総進攻／万里集九の来訪と道灌の和歌／
嫡子資康の元服／道灌、暗殺される／暗殺をめぐる戦乱／
太田道灌の人物像／伝説化していく道灌

第六章

長享の乱・永正の乱と長尾伊玄（景春）

222

長尾忠景の引退／長享の乱の勃発／道灌の死去で誕生した北条氏／
「長尾伊玄」の登場／長尾伊玄の参戦／父子敵対の状況／
相模における父子の対戦／永正の乱の展開／伊勢宗瑞との親交／
山内上杉氏への再度の叛乱／上野での上杉憲房との対陣／
最後の戦いと死去／長尾伊玄（景春）の人物像／
伊玄（景春）の子孫と白井長尾氏の成立

あとがき

273／主要参考文献 277

【凡例】本文中では以下の史料集を略号で示した。

北：『北区史資料編古代中世1』所収文書番号／北2：『北区史資料編古代中世2』所収頁数／埼：『埼玉県史料叢書11』所収文書番号／埼12：『埼玉県史料叢書12』所収文書番号／新埼：『新編埼玉県史料編5』所収文書番号／群：『群馬県史資料編7』所収文書番号／山内：拙著『戦国期山内上杉氏の研究』所収「戦国期山内上杉氏文書集」文書番号／扇谷：拙編『扇谷上杉氏』所収「扇谷上杉氏関連史料集」文書番号／景春：拙編『長尾景春』所収「長尾景春関係史料」史料番号／戦古：『戦国遺文古河公方編』所収文書番号／戦房：『戦国遺文房総編』所収文書番号／戦今：『戦国遺文今川氏編』所収文書番号

第一章 太田道灌の登場

太田氏の出自

まずは、太田道灌の出自からみていこう。もともと道灌の先祖については、必ずしも明確ではない。江戸時代に太田道灌の子孫が編修した系図史料によれば、清和源氏源頼政の子孫が丹波国太田郷（京都府亀岡市）に住し、地名を名字としたのに始まるという。同国「上杉庄」の地頭であった上杉重房に仕え、重房が鎌倉幕府将軍・宗尊親王の関東下向に供奉したのにもなつて相模へ移つたと伝えるが（「太田家記」『北区史資料編古代中世2』所収）、これは伝説の域を出ない。

そもそも上杉氏の成立は、重房の子頼重が足利氏の家領奉行人頭人を務め、足利氏所領の丹波国八田郷（京都府綾部市）等を所領とし、同郷内上杉村を名字の地としたことによるものである。そのため「上杉庄」というものは存在せず、重房も藏人を務める廷臣であった。

確実なのは、「梅花無尽蔵」（『梅花無尽蔵注釈』本刊本）第六所収「静勝軒銘詩并序」に、「厥先廼丹陽人、而五六葉之祖、始家相州也」とあるように、道灌の五、六代前の人物が丹波国より相模国へ移住したということである。道灌の五、六代前の人物というのは、おそらく鎌倉末期頃に活躍した人物と推測され、丹波で上杉頼重に仕え、それに従つて相模に移住した可能性が高いと考えられる。

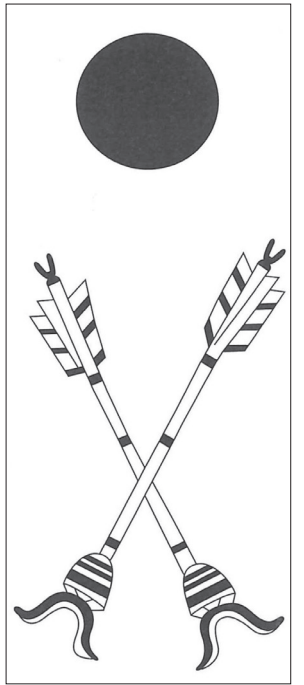
ただし、太田氏が扇谷上杉氏の系統にいつから被官化したのかは定かではない。

また、太田氏の名字の地についても確証はない。「永享記」（『続群書類従』所収）など江戸時代前期成立の軍記物には、武蔵国「都筑郡」太田郷を名字の地のように記している。しかし、都筑郡には太田郷は存在していないので、これは久良岐郡太田郷（横浜市中区）の誤りともみられる。同地は太田氏の屋敷があつたため、太田の地名が生まれたと伝えられている。あるいは、同地が名字の地の可能性も想定され、その場合には相模国への移住後に太田氏を称したことになるが、いずれも可能性とどまる。とはいえ、そのような所伝があることからすると、丹波よりも、むしろ相模移住後に太田氏を称した可能性が高いかもしれない。



太田道灌木像 東京都北区・静勝寺蔵

道灌の具体的な先祖として確認できるのは、それよりもかなり時期が下り、確実なのは永享十二年（一四四〇）正月にみえる祖父の資光である。前年の永享の乱で滅亡した鎌倉公方足利持氏の残党一色伊予守を相模今泉（神奈川県鎌倉市）に攻めた大将の一人として、太田備中守資光の名がみえている（『鎌倉大草紙』〔新編埼玉県史資料編8』所収）卷三）。この資光は、関東管領山内上杉氏の重臣で、侍所を務めていた犬懸長尾憲景と



太田氏の大紋・「かぶら矢」太田家譜

ともに大将を務めていることから、当時、すでに扇谷上杉氏の家宰（執権・執事）に就いていたと考えられる。

国崎西郡洪江郷金重村（さいたま市岩槻区）所在の平林寺の大檀越で、永和年間（二三七五～七九）頃に死去した「備州太守太田公」という人物である（『空華文集』『訓注空華工夫日用略集』）。続いて、応永三十四年（一四二七）頃に鎌倉極楽寺の上野国の所領回復に携わった「太田備中入道道暉」という人物がみえる（『金沢文庫文書』『神奈川県史資料編3上』五八〇二～三）。「備州」・備中守などを称しているから、これまでは道灌の先祖とみられてきたが、現在ではともに、鎌倉府奉行人の三善姓太田氏であろうと考えられている（湯山学『鎌倉府の研究』）。

もう一人は、永享七年の鎌倉府による常陸長倉氏討伐に従軍した人物としてみえる、「武蔵国の住人太田源次郎」である（『長倉追伐記』北2二四四）。その幕紋は、江戸時代の太田氏の大紋にあたる「かぶら矢」であること、仮名に「源」字が含まれていることから、道灌の先祖、さらに年代からすると祖父資光の世代にあたる人物ともみられる。しかし、登場する氏族は明らかに年代や状況が合わないものが多く、「太田源次郎」の存在そのものもただちに信用することはできない。こうしてみると、これまで道灌の先祖とみられてきたものは、ことごとく異なるといわざるをえない。

そうしたなか、唯一確実とみられるのが、応永元年（一三九四）十二月、鎌倉鶴岡八幡宮遷宮で地奉行を務めた扇谷上杉氏定の被官の「太田」である（『鶴岡諸記録』拙編『扇谷上杉氏』一〇頁）。道灌の家系は扇谷上杉氏の宿老家であるから、この「太田」が道灌の先祖であることは間違いない。年代から考えると、資光の父にあたる人物と考えられる。これ以上のことはわからないが、少なくとも道灌の家系は、道灌の曾祖父にあたる人物が、応永年代初めには扇谷上杉氏の宿老として存在していたとみられる。

父・太田道真

道灌の父道真の生年は、はっきりしていない。江戸時代成立の「太田家記」では、明応元年（一四九二）二月二日、武蔵河越城（埼玉県川越市）において七十八歳で死去したとされている。これを逆算すると、生年は応永二十二年（一四一五）となる。しかし、没年は「本土寺過去帳」（北2三四八）によると、正しくは長享二年（一四八八）八月三日である。これに享年七十八をあてはめると、生年は応永十八年（一四一一）となる。したがって道真の生年は応永十八年、もしくは同二十二年の可能性

が考えられるが、確定はできない。ちなみに後者は、主人である扇谷上杉持朝の生年に一致している。道真の父とみられるのが、先に触れたように、永享十二年（一四四〇）正月に扇谷上杉軍の大将としてみえる「太田備中守資光」である（鎌倉大草紙）。これは、彼が当時、扇谷上杉氏の家宰を務めていたことを示している。

これまで資光と道真の関係については、両者の活躍時期が近接していたため同一人物との可能性もあったが、その後、道真に関する新史料が発見されたことにより、両者は別人で父子関係とみられることが明確になった。すなわち、資光が史料にみられた翌月の永享十二年二月二十一日に、扇谷上杉持朝の宿老筆頭として「太田六郎右衛門尉」がみられ（政所方引付）埼四六六）、これが道真にあたと考えられる。彼が三十歳もしくは二十六歳のことになる。

そこでは、同じく扇谷上杉氏宿老の上田新蔵人・狩野伯耆守朗舜と同時に、室町幕府政所頭人の伊勢貞国から將軍足利義教の意向を伝える奉書を送られていて、関東の情勢を報告したことを「神妙」と称され、さらなる報告を命じられている。道真が扇谷上杉氏の宿老に位置していたことがわかるとともに、室町幕府に対しても直接に連絡できる立場であったことがわかる。そして、前月に史料にみられた資光はその父親とみて間違いなし、翌月に道真が宿老筆頭としてみえるようになっていくから、その間に家督の交替があつて、道真は宿老太田氏の当主、同時に扇谷上杉氏の家宰職に就任したと考えられる。あるいは、資光は軍事行動のなかで戦死でもしたのであろうか。

先の史料で、道真は初め官途名（朝廷の京官の官職名）「六郎右衛門尉」を称したことが確認される。この官途名をのちに道灌の後継者も称していることからみると、太田氏惣領家の歴代の官途名であったと考えられる。また、道真の実名を伝える確実な史料はないが、「鎌倉大草紙」では「資清」と伝えている。続いて三月十六日にも伊勢貞国から奉書を送られている。これは上田氏と同時に送られているものであるが、常陸における結城合戦の勃発を連絡したことに對して、さらなる報告を命じられている。

その後、文安四年（一四四七）までの間に、出家して法名自得軒道真を称している（内山文書「北一三三」）。同年四月二十日付で上野大蔵坊に対し「当方成敗の国中」を対象にした過書（関所などの通行許可書）を与えており、これが道真の発給文書としては初見である。この時に、すでに法名を称している。「当方成敗の国中」というのは、扇谷上杉氏が管轄している守護国を意味し、具体的には永享の乱以降に守護職に補任された相模国と、上杉禪秀の乱以降に守護職に補任されたとみられる安房国であろう。大蔵坊は上野修験の年行事であったから、その配下の修験者の守護分国における通行を許可するものになる。こうした過書の発給は、家宰の役割であった。

なお、このあとの道真の発給文書は八通が確認されているが、いずれも康正元年（一四五五）から展開された享徳の乱勃発以降のもので、同乱以前のものはこの大蔵坊宛だけである。

ちなみに、この八通の内容を記しておこう。